

マルクスを読む（その2）

——環境経済学と「労働過程」論の前提——

桂 木 健 次

A Reading of Works in Marx (2)

Kenji Katsuragi

4. これまでの追補

マルクスが『ドイツ・イデオロギー』で果たした社会理論として到達地平は、資本制市民社会の基底を〈交換〉に還元し、それを「類的活動」、「類的享受」の歴史形式であると、認めたところにある。その〈交換〉とは、一つの面では、「生産そのものの内部での人間の活動の互いの間での〈交換〉」（生産労働過程における）であり、また別の局面では「人間の生産物の互いの間での〈交換〉」（流通と分配過程）で表われる。こうして、〈交換〉は、人間の現実的・意識的な〈社会的活動〉とその成果の〈社会的享受〉にかかわり、人間の〈共同的な〉な *wesen*（存在の問題として、マルクスによって解明されていくことになる）。

マルクスは、人間の本質をこのように〈共同的存在〉として捉え、人類史を、人間がその本質を発揮する過程史、すなわち「人間的な共同体」という社会的組織を創造し生み出す過程史として考えた。その際、資本制的市民社会という社会組織が基礎をおく〈私的所有の関係〉である分業と商業（貨幣制）のもとでは、こうした〈共同的存在〉は疎外の形式のもとに表われている。そうした否定性、その極限的現存在として労働主体のプロレタリア化（他者から商品として買われることによる生産手段との出会い）へのマルクスの強い批判は、何処からきているのだろうか。前稿では、フォイエルバッハからの影響というよりも、ヘーゲルの脈絡に近いところから来っていると指摘していた。実は、シュテルナーの『唯一者とその所有』（それはフォイエルバッハの人間中心主義への辛らつな批判の書である）がマルクスに示唆した処を見逃すべきではないのである。

シュテルナーは、「所有とは盗みである」というブルードンの命題に対して、「所有は盗みではなく、所有によって初めて盗みが可能となった」と述べた。つまり、「随意に処理、管理しうる処のあるもの（モノ・動物・人間）」に対する無限定の支配として表われている

のが所有であり、唯一の権力者としての力（gewalt）たる国家が、「法の承認」として、所有を保障している以上、プルードン達社会的自由主義の言うように、所有を「万人のものとしたところで、この「万人」の所有は、個人にたいしても恐るべき主人公になるだけであろう、と。マルクスは、このシュテルナーを意識しつつ、ヘーゲルから、市民的人間の私的所有と社会関係の歴史的認識の視座を読み取り、人間の疎外という否定制を極限的に担う現存在（Dasein）としてプロレタリア（賤民）化した市民を見たのである。だが、所有意識を抱える人間の社会がモノと動物（生物）に向い合う位相での、「その無限定な支配」のことに気を回していたシュテルナーの認識地平を、マルクスがどれだけ気付いていたかは、知ることはできない。

1948年12月から翌年1月の時期にマルクスは、イギリスの啓発的資本家エンゲルスとともに、『共産主義者宣言』という革命の書を書いている。初版本は、2月にロンドンで刊行され、3月に執筆して、同年中にパリとケルン（ドイツ）で配布された「ドイツにおける共産主義者宣言の諸要求」というちらしとともにセットとなった書である。これは、書斎と思索の人マルクスが〈革命家〉として現実社会へ関わった側面であるが、その文中に散りばめられた社会認識の理論的部分に限って、見ておくことにする。

エンゲルスは、相続した家産を〈資本〉として回しながらも、私的所有に強い批判を持っていた。かのロバート・オーエンの思想的息子ではあったが、彼のように〈理想郷的企業体〉の経営にのり出さなかった。当時のエンゲルスは、〈産業資本〉が封建的なきずなを断ち切り、生産諸力を上昇（解放）させたという歴史的役割をかなり評価していた。マルクスが既に、所有との関係で、社会史的にプロレタリアートの歴史的台頭の局面に移って、普遍的な諸個人の条件を形成する必要を痛感し、それとの関連で〈資本〉制時代の生産力解放の意義を見ていたこととは、若干の違いがあった。

当時のヨーロッパ大陸の社会批判派では、ブランキズムとプルードン主義の勢力が強く、スイス、南フランスなどでは、バクーニンらのアナキズムの勢力が強くなっていた。マルクスの思想は、ロンドンとパリに出ていたドイツ系の亡命者の思考水脈にしか賛同を見出しえなかった。そのマルクスにイギリスの啓発的資本家であるエンゲルスが、リカート派とJ・S・ミルにはじまるフェビアン派的改良主義の思想水脈を離れて、共鳴するようになっていくのかは、極めて人間味臭い由縁を覚える。フランス近代革命の「最終の補完」と言われ、その統治主体の〈市民〉になれなかった都市賤民を巻込んだ1848年のパリ2月革命の余波がドイツに及んだ3月、イギリス人エンゲルスはドイツにとび、ドイツ共産主義者宣言の形成を試みたが、当時の党派としての『宣言』の現実的勢力は、亡命中のシャッパー、ウォルフなどが二人の周りにいただけであった。

マルクスたちは、『宣言』を歴史的に当時の「普遍的な革命目標」として、蜂起大衆の中に浸透させようとして、「ケルンにおける党の立場」「ドイツにおける共産主義者宣言の要求」という文書をまいたのである。この時の彼等の問題意識は、「市民革命の完成」とい

う時代課題のなかに、都市賤民の暴動的蜂起を如何に位置付けて、歴史的に捉えきるか、ということにあった。イギリスでは、リカードウ左派は工場労働者（プロレタリア）および都市賤民の生活文化の水準を引き上げる〈分配革命〉の提唱をおこなっていた。これと違って、マルクスは、プロレタリア化していく賤民とブルジョワ市民との対立と矛盾が「非妥協的」であることを主張したのである。すなわち、産業革命に伴う大工業が生み出した歴史的傾向の中に「プロレタリア」を位置付けようとしたのである。だからと言っても、都市賤民の暴徒化を歴史に委めることの出来なかったマルクスは、原理的に、生産と所有の諸関係におけるプロレタリアートの歴史的 position を明示する課題を『宣言』に書いていた。

その際に、彼は、パリでの短い亡命生活中に見聞したブルードン主義を、何よりも意識していた。エンゲルスの方では、相続資産の〈資本的運用〉からの収益を亡命革命家に「投資」し、その〈慈善的オーエンの運用〉を勧告する啓発派ブルジョワを意識していた。ブルードンは、「所有」を、歴史的に、他社の「無所有」化、すなわち「盗み」である、と見た。しかし、本質的には、所有を人間の活動そのものの成果として捉えると、「個から略奪すべからざるもの」であることを主張していた。ブルードンは、機械制大工業化と信用制度に基づく資本家的社会へと転変していく歴史的過程への批判を持ち、資本制を介せずに、勤労的市民諸個人の「自由連合」的社會へむけた綱領を、行き詰り賤民化の危機を抱えた中世都市時代以来の都市のインダストリーな市民や城外市民に呼び掛けていたのである。マルクスは、これに対して、資本制的資本蓄積に先立つ単純商品生産関係の段階からイメージした「小市民的・職人的社会主義」というラベルを張り付けた。

後に、『資本論』初版を草し終えた1970年代のマルクスは、ロシアのナロードニキのからの質問を契機に、非西欧の世界での「小市民的・農民的・職人的社会主義」の意義についてとまどうことになるが、1848年当時の彼には、「西欧的な歴史的運動」である資本制の釜の中で形成されるプロレタリアという階層の階級的解放に、全社会の解放の歴史的十分条件を求めていくことに精一杯であった。

彼はいう。「これまでのすべての歴史は階級闘争からなる歴史である」。「封建的社會の没落の中から生まれてきた近代の市民社會は、階級対立を揚棄していない。それはただ、新しい諸階級、新しい抑圧諸条件、新しい諸闘争形態を、古いものの代わりに充てがっただけである」（1章）。マルクスは、「我々の時代、すなわちブルジョワジーの時代」がいかに生成してきたか、について素描している。中世以来の「城外市民層」のマニファクチュア化による都市近代的市民（第3階級）の形成と市民革命による〈近代市民（ブルジョワ）社會〉の生成が、大工業とそれがつくりあげる世界市場とによって、〈資本制的ブルジョワ社會〉に転変していった経緯についてである。ブルジョワジー（資本制的市民）が歴史上に演じた「最高度に革命的な役割」は、一つに、目上の者に結び付けられていた封建的なきずな「人格的尊厳、すなわち支配關係」を、「現金勘定」による關係、

「交換価値」という物と物との関係に媒介された社会関係に置き換えたことである。二つは、ブルジョワジーは「生産用具を、従って諸関係、従って全社会関係を絶えず革命することなしには、生産しえない」ので、「生産物の販路をたえず拡張しようとする欲望」に駆り立てられる。だが、このことが、世界市場の略奪を通じて、世界的に、諸国民相互の間の全面的な交通と依存を形づくるという〈資本の文明化作用〉を生み出していく。三つには、民族的に国家を形成していくことである。(1章)。

こうして、ブルジョワの時代は、過去のすべての時代を合わせたよりも、より多量に、巨大な「生産諸力」を形成し、農村を都市の支配下におき、未開・半未開諸国を文明国に、農業諸民族社会をブルジョワ文明に、東洋を西欧に従属させた。だが、それがまた、自然へのブルジョワ文明の支配の道程でもある。このことの認識は薄れていて、『経哲草稿』のように、我々には見えてこない。このことは、マルクスが次のように言う時に、より明らかである。

つまり、このブルジョワの社会と化した市民社会もまた、そのうちに「近代的生産諸力」の反逆を含んでいる、ということをマルクスが、商業恐慌とプロレタリアートに特徴的に認める場合である。というのは、マルクスによると、恐慌こそ、ブルジョワが自らに死をもたらす〈武器＝革命〉の客観的・歴史的根拠を形成するからであり、他方では、この生産諸力という武器を執り、使うべき人々、近代的工場労働者であるプロレタリアートがつくり出されているからである。マルクスは、この近代的労働者、プロレタリアートの賃金労働の性格、自分の搾取者たる資本関係の再生産が、「労働の差異を消しさり、均一化」する過程として、論じている。この「労働」の性質の変容は、その自然との関係においてではなく、工場制大工業における機械の介在に表象的には従属する労働として論じられている。工場の中の生産工程の一部に単純労働として閉じ込められた労働が語られているのである。

それでは、こうしたプロレタリア一般に、マルクスたちの共産主義党はどのように関わりあうというのだろうか。書かれているところでは、共産主義は、(1)プロレタリアの諸々の国民的闘争のなかで、国民性にとらわれない、全プロレタリアートの「共同の利害」を指摘し主張する、(2)プロレタリアートとブルジョワジーの両階級間の闘争が経過する様々な発展段階において、常に運動「全体の利害」を代表する——ことによって、〈法のプロレタリア諸党派〉と区別される(2章)。

そして、当面の目的は、「プロレタリアートの階級への形成、ブルジョワジー支配の転覆、プロレタリアートによる政治権力の獲得」であると、言う。ここでは、マルクスが、自らの立場を、他の「プロレタリア諸党派」、すなわち第4章でいう「イギリスのチャーチスト、北米の農業改革派、等々」から区別しようとすることによって、失った視座が問題である。そのことについては、後に取り扱うが、当時のマルクスは、イスト(革命主義者として、「プロレタリアートの階級への形成」という課題、「階級闘争からなる」人類史

の「前史」を目的意識的に終らせる〈意識的存在主体〉へと、歴史的所与としてある労働者大衆を造り変える教育に関わろうとしていた。別の言葉でいうと、自然成長的な「団結」の生成過程「恐慌による窮乏化に伴うプロレタリアートの団結の拡大という階級闘争」から、「階級闘争を終らせる階級闘争」という革命を展望する論理的な結節点を捜し求めている。

5. 労働過程と〈プロレタリア〉性

マルクスの〈プロレタリア〉という概念にとって、一つのキーワードをなすものに、生産＝労働主体の生産手段からの分離の問題がある。『経済学批判要綱』という中期のマルクスの草稿のなかで、始めて論理化された理論地平であるが、それは、従来の多くの研究においては、「労働過程」論として扱われた生産過程における、〈ひと〉と〈もの〉との社会性、社会関係の基底に横たわる技術過程的な位相の問題として考察されることがほとんどなかった。つまり、近代的工場労働者の定在（階級としてのプロレタリアート）が「被収奪」「被搾取」のコードで扱われていることにかかわっている問題視界に限られているが、あるいは、そうして問題視界と対称をなしているところの視界、つまり、現社会関係の系を批判し〈革命〉し、「次期社会（社会主義社会）」を形成する主体的定在というコードでしか、〈プロレタリア〉は語られてこなかった。ところが、当のマルクスの労働過程論は、その技術過程の深みにおいて、〈生産一般〉という独立した「編」を窺ったとおり、『ドイツェ・イデオロギー』で失念した〈ひとの営み〉としての自然への関わりを思い起こしている。

マルクスの〈労働の過程〉を問題にするのは、一つには、それが人間と（人間を除いた物的）自然系との〈素材交換〉であるというメタポリズム的な面に気付いていたことに注目したいからである。このメタポリズムの概念を、マルクスは、オランダ人の学者ヤコフ・モレースコット（1822-1893）から学んでいるが、それは、物質とエネルギーの遣り送り（循環）として、生活＝生命の再生産（循環）を捉えていた。今日流に言えば、熱力学第一の法則である「物質保存の法則」については、十分な理解を持っていたのである。しかし、物質とエネルギーの「拡散の法則」であるプロセスの不可逆性にかかわる熱力学第二の法則については、理解力の外であった。

このように、マルクスを上げ底的に読み取るにおいても、素材交換（物質循環）を理解したマルクスが、どこまで、経済過程（生産から消費にいたる）におけるエネルギーと物質のフローを把握する手掛りを持っていたかという、きわめて否定的である。マルクスがその素材交換という経済本質を学びとったモレースコット自身は、生命／生活の回路が実に物質とエネルギーの循環にあることを、極めて現代の生態学に近い内実で掘りだしている（J. Martinez-Alier）。しかし、環境科学の現代の地平からすれば、生命生成に関

する観点から、素材交換という物質循環の基本は、



光合成(A)と呼吸(B)による酸素の生成、炭酸ガスの抑制、そして水循環の介在による、定常的な均衡に求めるべきであろう。マルクスは、こうした視界をもたない。

つまるところ、マルクスは、プロレタリアートによる〈生産力〉解放のため、「^カ稗」になっている資本制的〈生産関係〉の変革を、 Kommunismusとして宣告しようとしていることになる。つまり、社会関係としての資本制の〈全的否定主体〉、というプロレタリアートの自己解放は、自然への対象的働きかけ（加工）を全面的に肯定されているのである。こうした原理が、後世にどのような事態をもたらすことになるかと言うと、現代に下りるまでもなく、ロシア革命直後の〈土地布告令〉のことを、挙げるだけでよい。レーニンの政権が布告した〈土地布告令〉は、自然生態環境の保全にかんする一連の布告とともに、まだ当時の政権の「友」であったナロードニチュストヴォ（エスエル、トルドヴィキ左派）の政策からもらったのである。それは、自然と〈土〉から発想し、それへの〈農〉的ななかかわりから出て来た見地であり、ロシアのマルクス派（ボリシェビキ）の依拠する〈工場〉と〈大都市〉の〈国家〉の論理（工業と電化による生産力開放のための）からは出てこなかった。政治家であったレーニンは、革命後の都市の労働者が〈土〉に回帰する「想い」の迂ねりに直面して、そうした〈農〉的パワーをどう革命政権の側に組み入れるかを、政治力学的に配慮したのである。そうした布告であった。こうした〈土〉からの思考が、いまのソヴェトにも連綿と流れていることを、シベリアのバルト海の保全に積極的に関わっているラスプーチンという小説家たちの農村派に認めることが出来よう。

マルクスは、工業都市と産業資本が農村からの「歴史的」な資源収奪のうえに、成立したことを知っている。

『経済哲学草稿』で、マルクスは、人間とは、労働という「自然への対象的働きかけ」を、存在の本質的契機として、つまり「悦び」として持つ、と言った。この労働論は、その後の経済研究の過程で、ヴァリエントを異にする〈時間費用〉としての労働把握を組み込むことになった。つまり、生産力の上昇をとまなう「費用時間の短縮」、従って自由時間の拡大という、歴史過程な〈疎外〉の取り戻し（自由の王国への歴史的到達）を、私的所有の廃止と並んで、人間解放における〈労働の解放（廃止）〉として捉えていくようになった。

もともと悦び（自己実現）であるような労働過程、従ってまた〈生産一般〉における、「一般的生産手段」としての自然（die Erde）を措定することが、人間による人間の支配にとまなう、人間による自然の支配（対象的働きかけの素材視！）と言う『草稿』の視座とどう重なり合うのだろうか。

この「一般的生産手段」において、労働という対象化活動を所有の「社会的関係」、人

〈間〉関係の位相で括るのであるから、その技術過程という実内的内実は、消えてしまっている。つまり、人間にとって、自然とは、富を引き出す素材としての対象物に据えられてしまっている。『草稿』がもった、自然との〈共鳴〉を伴う労働、という根源的な響きは、もはや見られない。それは、何故なのか。

後にマックス・ウェーバーが、資本主義の〈精神〉を「節約（投資）」と「禁欲」に求めたように、工場制に依拠する資本は、時間費用と労働生産性を〈精神〉としている。つまり、余暇、自由時間は、資本主義の〈精神〉の外側にある。せいぜいのところ、「労働のための一休息」であるのだ。

ところが、経済学の祖とされるアダム・スミスは、「休息のための労働」と言っていた。これは、当時のスコットランド啓蒙が、フランス＝大陸の系譜を持っていたことになる。シモンディ、そして後のローザンヌ学派において見るができるように、フランスの場合、労働と休息（余暇）とのバランス感覚が強い。これが、マニファクチュア労働を見るスミスの目にも、入りこんでいたのである。だから、時代を下り、イギリス古典経済学（リカードウ）になると、そうしたスコットランド啓蒙の響きは消え去り、休息は経済学の対象から外されてしまう。つまり、価値論、富規定とは無縁であると宣告されないまでも、そうした価値の規定に積極的な意味を持たなくなってしまった。しかし、ジョン・S・ミルは違っていた。

マルクスは、リカードウに重心をおきながら、イギリス古典経済学を「批判的に」摂取している。そして、そうしたリカードウの傾きに、何時のまにか、マルクス自身捕らわれていった。だから、後々（現代）の東洋日本のマルクス経済学派が、公害をはじめ自然破壊を、「私的資本節約」としてしか説明できず、「良い」生産力と「悪い」生産力を語る時、単に生産関係における〈支配・非支配〉だけからしか、問題を見ることが出来ないのも、その学者の責任というよりも、マルクス『資本論』における〈生産力〉規定の限定制として、知るべきであろう。

資本制的な〈資本〉の運動は、費用節約にも一因をもつ〈外部不経済〉について、いろいろな社会的規制を受けるようになり、そうした費用負担（内部化）および原点規制をせざるを得なくなっている。そして、更に、生産力そのものの〈開放〉の「無限」視自体に、問題の根因があることも、明らかになってきている。にも拘らず、現代のマルクス達は、〈生産関係〉に「悪玉」探り出すことに夢中である。プロレタリアは、その生産過程で〈非支配〉的定在であるので、国家資本や私的資本の自然破壊に対しては、責を免れるのだろうか。また、「プロレタリア独裁」の社会主義諸国における企業体によるそうした自然破壊も、そうであるのか、雇用と賃金を確保するために、その事業体の「パイ」を大きくする生産（自分たちには労働）過程は問われないのだろうか。知床の原生林を保全するか、樹齢の古い原木を伐採して経済的価値に換えることで、〈仕事〉を確保したい

とするのか、全林野の労働組合を「苦悩」させた出来事一つとっても、問題は簡単ではない。〈ひと＝ヒト〉という生物種の社会的再生産の到りついた現代が、資源として必需するその〈生産力〉の維持と社会配分の〈全体〉が問われているのである。その意味では、余暇と自由の王国（ Kommunismus ）を、生産力上昇の「明日」に委ねたマルクスの文明論が問われるのである。 (続)

参考文献などは、稿の最後に一括する。